伝統工芸技術の継承者ってどんな人かな？

今回ジュニア記者たちが取材した村田健一郎さんは、大正２年(1913)から続く老舗・泪橋 大嶋屋提灯店の四代目です。手描提灯の職人である父・修一さん(荒川区登録無形文化財保持者)の技を受け継いでいます。なぜ、村田さんは職人の道を選んだのでしょうか？　また、提灯文字についても詳しく教えてもらいました。

どうして職人の道を選んだのですか？

昔からモノづくりが好きで、何かの職人になりたいなと思っていました。実家が提灯屋だったということもあり、子どものころから提灯作りの色塗りなどの手伝いをしていました。そのため、この文化をなくしたくないと感じて店を継ぐことにしました。今でこそ提灯にいろいろな文字や絵を描いていますが、昔はプラモデルのような立体的なモノづくりのほうが得意でした。

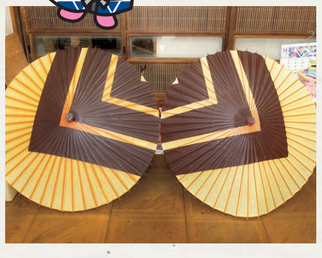
提灯文字や道具について教えてください

▼描く円の大きさによって、使う「ぶんまわし」の大きさも変えていきます。使い込まれた道具には、職人の技術と歴史が詰まっているようです

提灯文字は“面相筆や平筆など少しずつ太さの違う筆”や“水にぬれても流れない専用の塗料”を使って描かれています。また、家紋を形作る円や模様を描くために「ぶんまわし」と呼ばれる大きな木製のコンパスも使われています。

提灯文字は提灯に文字や家紋などを描く技術です。江戸時代、提灯は、携行用の照明具として広く使用されました。文字や家紋などを描き、儀式や祭礼、店舗用の看板としても用いられました。文字の線を太くする理由は、提灯を飾った時に遠くからでも文字がはっきり読めるようにするためです。

村田さんが描いているのは文字だけじゃないよ！



◀歌舞伎の舞台で使われる小道具も手がけている村田さん。提灯と同じ技法で模様が描かれた傘は、４つ合わせると模様が家紋の形になります

▶提灯のあら坊とあらみぃのイラストも村田さんが描きました。お客さんが持ち込んだデザインやイラストも提灯の絵柄にすることができます

桑原明莉さん

勝又祢音さん

村田健一郎さんはこんな人

荒川区生まれ。伝統工芸技術の継承者を育てるために区が行っている、「荒川の匠育成事業」を活用して修業。荒川区登録無形文化財保持者である父・村田修一さんに弟子入り。
荒川区伝統工芸技術保存会会員。

Kenichiro Murata

はばたけ！若手職人展(ウェブ版)

村田さんをはじめ、区内には伝統工芸技術を受け継ぐ若手職人がたくさんいます。
チェックしてみよう！

あらかわ伝統工芸Week

３月19日(土)～３月27日(日)で開催
村田さんの実演や体験もあるよ
問合せ　荒川ふるさと文化館

自分の名前を提灯に描いてみよう！

村田さんに習って、ジュニア記者たちも提灯文字の手描きにチャレンジ！　下書きは、ジュニア記者たちには難しいので、村田さんが書いてくれました。というわけで、ジュニア記者たちは文字の縁取りからスタート。「名前の画数が多いから大変」と桑原さん。勝又さんは「緊張します」と少しずつ丁寧に作業を進めます。

村田さんに習う

1

▲村田さんの作業を見つめるジュニア記者たち。村田さんは提灯にはられた和紙に、鉛筆で文字の下書きをしています。紙を破らないように、繊細な力加減が必要です

2

◀下書きが終わったら、線の上をなぞって縁取り。文字の外側の形を整えてから、線の中を塗りつぶす作業をします

3

▲「明かりを点した時、色ムラが透けて見えないようにするため、筆先で塗料の厚みを調整するのがポイント」と村田さん

4

鮮やかな赤色の塗料を選んだ桑原さん。文字の細い部分を慎重に塗っていきます

明るい青色の塗料で文字を塗っていく勝又さんは、真剣な目つき。筆の使い方も慣れてきました

上手にできました！

塗料を乾かしたら手描提灯の完成です。「ムラなく塗るのが難しかったです」と勝又さん。桑原さんは「職人さんの仕事はすごいなと思いました」と笑顔。ジュニア記者二人の提灯は村田さんも絶賛する素敵な出来栄えになりました

提灯の種類

▶提灯の形は、使われる場所や用途によっていろいろな変化を遂げてきました。村田さんが持っている２つの提灯は、上下の蓋を重ねて小さくたたむことができる「箱提灯」です

▲今回の体験で使ったのは、弓のような形の持ち手が付いた「弓張提灯」。ボールに似た形のものは「丸型提灯」と呼ばれています

泪橋 大嶋屋提灯店 ご案内

荒川区南千住
2-29-6
☎(3801)4757